

報 告

リハビリテーション専門職を目指す学生への 園芸療法教育の実践

Horticultural therapy teaching practice for rehabilitation profession students

珠数 美穂¹⁾ 佐竹 勝²⁾ 珠数 孝¹⁾ 小林まき子¹⁾

要約：園芸療法は、園芸活動を通して植物や自然環境と直接関わることで五感を刺激し心身に様々な療法的効果をもたらす。また、対象者の健康に直接・間接的に役立つ療法として、幅広い年齢や多様なニーズに応えている。大阪河崎リハビリテーション大学では、2006年の開学当初より、園芸療法が持つ効果を積極的に活用できるセラピストを育成することを目的に、園芸療法科目が導入された。当大学の園芸療法関連授業は、主に1年生を対象にしていることから、セラピストの基本を学ぶ教育的効果をもたらしている一方、園芸療法の実践を行うための時間が少ない。また、園芸療法の臨床実習の場がないため、園芸療法を専攻したいと望む学生のニーズには応えられていない。今後は、卒業生の活動を検討し、園芸療法士のカリキュラムを再構築していきたい。また、研究や情報提供の機能を充実させることで、園芸療法が持つ効果を積極的に提供することができる園芸療法士を育て、活躍を支えることで、対象者の多様なニーズに沿った園芸療法を届けることに貢献していきたい。

Key Words：園芸療法教育、園芸療法、大学、リハビリテーション

1. はじめに

1990年頃に欧米の園芸療法が日本に紹介されて以降、園芸療法の普及とともに園芸療法士を育成する園芸療法教育が行われてきた¹⁾。大阪河崎リハビリテーション大学では、2006年の開学当初より、園芸療法が持つ効果を積極的に活

用できるセラピストを育成することを目的に、園芸療法科目が導入された。

これまでに、園芸療法教育の現状、目的、効果に関するいくつかの報告のなかで園芸療法教育の方向性は示唆されているものの²⁻⁴⁾、まだ統一された教科書やカリキュラムはなく、各教育機関が独自に工夫を行いながら園芸療法士を育成しているのが現状である。

本稿では、日本の園芸療法や園芸療法教育を整理し、当大学の園芸療法教育の取組みや課題などを踏まえ紹介することで、今後の園芸療法教育を発展させる材料としたい。

Miho Juzu

大阪河崎リハビリテーション大学

E-mail: gacha@mbm.nifty.com

1)大阪河崎リハビリテーション大学

2)リハビリテーション学部 作業療法学専攻

2. 日本の園芸活動・園芸療法と園芸療法教育について

2.1 近年の園芸活動

2.2.1 市民による園芸活動

1990年代に流行したガーデニングは、今日では趣味として広い世代に定着している。社会生活基本調査（平成18年度）によると、高齢者の40%近くが趣味や娯楽として園芸・ガーデニング・庭いじりを活用しており、趣味・娯楽の中で最も高い割合を占めている⁵⁾。近年では、趣味としての農耕（市民農園での野菜栽培）も、健康を目的とした活動として人気を集め、利用者が増え続けている⁶⁾。

2.2.2 教育機関における園芸活動

学校教育における園芸活動は、理科教育や環境教育の目的で行われてきた。近年は、こどもの自然体験の不足を背景に、「こころの健全な育成のため」として、多くの学校で園芸活動や自然体験活動が行われることが求められている⁷⁾。

2.2.3 医療・福祉施設における園芸活動

園芸への親しみやすさや愛好者の多さから、医療・福祉施設では楽しみ、気分転換、生きがいを目的として園芸活動を取り入れており、半数を超える施設で何らかの植物栽培をしているという報告がある⁸⁾。また、作業療法的一种目として園芸活動を行っている医療・福祉施設も多く、精神科医療施設の6割近くで取り組まれている⁹⁾。職業訓練を目的とした施設や授産施設では、農園芸による生産活動や除草・公園清掃などの活動が行われている。

2.2 近年の園芸療法

これらの活動に対して、園芸療法は専門家が介在して行われる、対象者の健康増進を目的と

した園芸活動である。

園芸療法の効果は、植物とそれを取り巻く自然環境に対象者が直接関わることで得られるもので、五感への刺激とそれによる情動や身体の反応が基本となっている。そうした特徴から園芸療法のエビデンス確立は難しいとされてきたが、ストレス軽減、認知症の予防、痛みの軽減などの治療的な効果が徐々に明らかにされてきた¹⁰⁻¹³⁾。

直接的な心身への治療効果だけではなく、歩行や姿勢保持の訓練などへの動機付け¹⁴⁾や、生産的な活動を生きがいづくりに活用する施設も多い。また、園芸療法の教育的な要素を、非行少年や犯罪者の更生に活用する場合もある。

園芸活動には、土作り、種まき、水遣り、除草などの多くの難易度の異なる作業がある。年齢の違いや病気や障がいのあるなしに関わらず同じ立場で園芸活動に携わることができるため、地域コミュニティの活性化に活用する事例も多い¹⁵⁾。

このように、対象者の健康に直接・間接的に役立つ園芸療法は、幅広い年齢や多様なニーズに応える手段となっている。

2.3 日本の園芸療法教育について

大学・専門学校などの教育機関における園芸療法士認定の取組みは、資格認定制度や講義内容からいくつかの種類に分けられる¹⁶⁾。

このうち、最も充実した内容を提供しているのは日本園芸療法学会の園芸療法士認定基準を満たす教育機関である。

当大学を含む大学実務教育協会の園芸療法士認定カリキュラムを提供する教育機関は、リハビリテーション、社会福祉、保育、看護などの専門分野に加えて園芸療法を学ぶこととなっている。園芸療法そのものを学ぶ時間は限られているものの、医療・福祉・教育分野の教育が充実していることが特徴である。

3. 当大学の園芸療法教育について

当大学では、緑豊かな環境を活かし、園芸活動や自然体験がもたらす教育的な効果も享受しながら園芸療法教育を行っている。

以下に、当大学が行っている園芸療法関連授業の目的、履修学生の状況、授業の流れおよび結果を紹介する。

3.1 授業の目的

園芸療法関連授業の目的は、以下のとおりである。

- ① 園芸活動を対象者の健康のために効果的に活用できる園芸療法士の育成、
- ② 園芸活動を通じて植物・虫・鳥などの生き物と触れ合うことにより、他の生き物と人との関わりや生命について学ぶ、
- ③ 生き物の世話をすることの楽しさ、難しさを体感し、ケアの基本的な姿勢を学ぶ、
- ④ チームメンバーの得意分野を活かし協力しあいながら作業をすることで、円滑な人間関係のコツを学ぶ、
- ⑤ 栽培の過程を通して起こる問題に対し、解決策を考え、実施し、振り返ることにより、問題解決のプロセスを学ぶ。

3.2 履修学生の状況

3.2.1 履修学生の構成

園芸療法関連授業は、全ての専攻の学生が選択できるようになっており、主に1年生が履修している。園芸療法関連授業の履修学生の数と、各専攻の人数に占める割合を表1に示した。作業療法専攻の学生にとって、園芸療法関連授業は「選択必須科目」であるため、ほぼ全員が履修している。一方で、理学療法・言語聴覚専攻の学生は「選択科目」となっていることに加え、「園芸療法は作業療法の一領域である」というイメージがあるためか、園芸療法に強い関心を持つ学生のみが履修している。

3.2.2 履修学生の園芸療法の認知度

園芸療法が学生にどの程度認知されているのか、また当大学の園芸療法教育への取組みが学生の受験・入学行動に影響を与えたのかどうかを知るために、園芸療法関連授業を履修した学生に対し、入学直後にアンケートによる調査を行った。なお、学生には事前にアンケートの利用目的を伝え同意を得た(図1)。

アンケートに回答した45名のうち、入学以前に園芸療法という言葉を知っていた学生は

表1. 園芸療法関連授業を履修している学生数と全学生に対する割合

年 度	専 攻		
	作業療法	理学療法	言語聴覚
2006年度	52人 (95%)	0人 (0%)	1人 (5%)
2007年度	57人 (96%)	10人 (15%)	14人 (41%)
2008年度	44人 (100%)	21人 (29%)	5人 (33%)
2009年度	32人 (100%)	8人 (11%)	8人 (38%)
合 計	187人	39人	28人

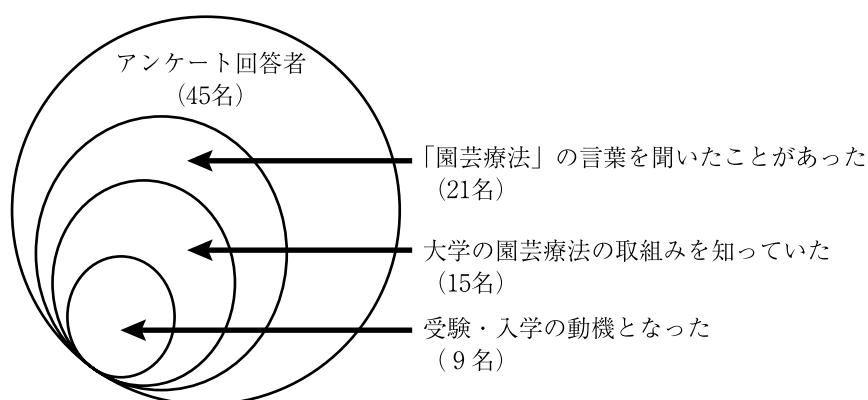


図1. 園芸療法の認知度と入学動機（2009年4月調査）

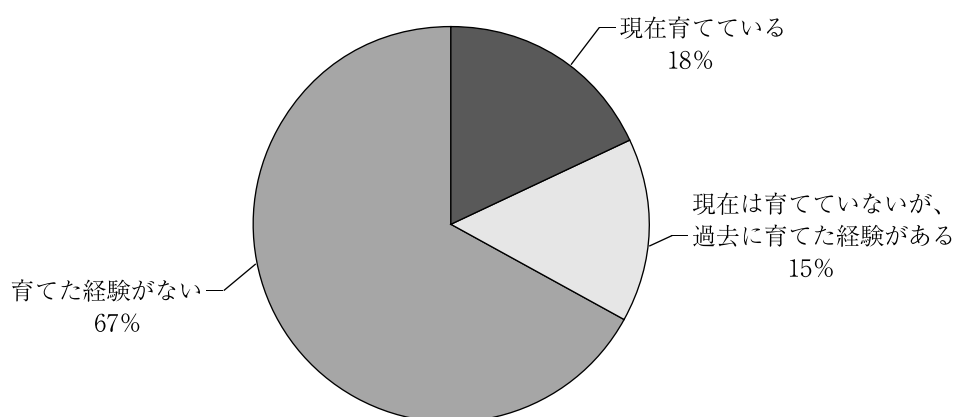


図2. 履修学生の大学入学時点での植物栽培経験（2009年4月調査）

21名（49%）であり、そのうち当大学が園芸療法教育に取り組んでいることを知っていた学生は15名（33%）であった。また、園芸療法教育への取組みが、当大学への受験・入学の動機となった学生は9名（20%）であった。

3.2.3 履修学生の植物栽培経験

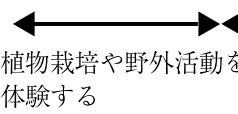
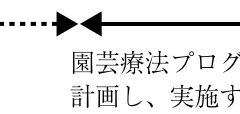
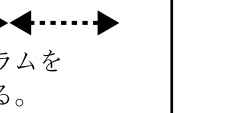
園芸療法関連授業を履修している学生に、植物の栽培経験がどのくらいあるのかを知るために、過去に自主的に植物栽培を行ったことがあるかどうかを聞いた（図2）。

その結果、15名の学生は、自主的に植物を栽培した経験を持っており、そのうち8名（18%）は調査時点で植物を栽培していたが、30名（66%）の学生は自主的な植物の栽培経験がなかった。

3.3 授業の構成

当大学は、大学実務教育協会認定のカリキュラムに沿って、園芸療法関連授業を構成している（表2）。

表 2. 園芸療法関連授業の流れと主な目的

科 目 名		年間スケジュール											
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3月
講 義	ガーデニング (前期 2 単位)	植物栽培の知識・技術を学ぶ											
	生 物 学 (前期 2 単位)	植物を含む生物の生理・生態、生物間関係を学ぶ											
	園 芸 療 法 論 (後期 2 単位)	園芸療法の知識・技術を学ぶ											
園芸療法実習 (通期 2 単位)		<div style="display: flex; justify-content: space-between; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  <p>植物栽培や野外活動を体験する</p> </div> <div style="text-align: center;"> <p>(管理作業)</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>(管理作業)</p>  <p>園芸療法プログラムを計画し、実施する。</p> </div> </div>											

3.3.1 前期（ガーデニング・生物学・園芸療法実習）

1) 講義

ガーデニングでは、植物を栽培し活用するための知識と技術を、生物学では、植物の生理・生態、生物間の関係などを講義形式で学ぶ。

2) 実習

前期の園芸療法実習は、春・夏野菜の栽培や花壇・庭の管理を通して、ひととおりの園芸活動を体験することを中心に行っている。園芸活動は、五感、体感、感情に働きかけることが多く、しかも時間を経て初めて感じる感覚（期待感・達成感など）も多いためである。学生の多くは園芸活動や自然と関わった体験が少ないため、プラス面もマイナス面も自ら体感することが重要だと考えている。

園芸療法実習は、5・6人ずつのチーム単位で活動しており、チームでの活動を円滑にするために、チーム作りのアクティビティや、チームリーダーへのリーダー教育などを取り入れている。

基本的な園芸作業を学んだ後は、学生にガーデンや畑の水管理を託している。夏休みの管理作業では、チーム内でのコミュニケーション不足、責任感の不足、知識不足、または気象や他

生物の影響によって、植物を枯らしてしまうことが少なからずある。枯れた植物を観察し、自分たちの行動を振り返ることで、なぜ植物が枯れたのか、どうすれば枯らさないですむのかを考え、話し合い、次に活かすための貴重な教育の場となっている。

3.3.2 後期（園芸療法論・園芸療法実習）

1) 講義

園芸療法論は、前期で学んだ園芸活動を、対象者の健康のために役立てるための知識と技術を講義形式で学ぶ。園芸療法論の後半には、園芸療法士として活躍している実践家を数人招き、活動内容、対象者の様子、実践における工夫や苦労などを直接聴く時間を設けている。

2) 実習

園芸療法実習では、秋・冬野菜や花壇の管理に加え、前期・後期で学んだことを実践する場として、対象者を想定して園芸療法のプログラムを計画・実践する「プログラム実習」を行っている。園芸療法士役、対象者役、観察者の3役をそれぞれ体験する。立場を変えて繰り返す行うことで、園芸療法士に求められる知識や技術を、体験を通して学ぶことができる。

3.4 授業以外の取組み

園芸療法関連授業は、1年間で終了する。授業だけでは最低限の知識しか伝えることができないため、園芸療法をさらに深く学ば

い学生の勉強の場として、様々な取組みを用意している。授業以外の取組みを表に示した(表3)。

表3. 園芸療法に関する授業以外の取組み (2009年10月現在)

授業以外の取組み	登録者数	主な目的と活動内容
部 活 動 (園 芸 部)	学生 約40名	自主的に作物を育て活用する。 施設へ園芸療法ボランティアとして訪問することもある。
園芸活動ボランティア (ガーデンメンバー)	学生 26名 教員 10名 グループ施設 1 施設	大学内外のガーデン管理を行う。園芸活動の教育の場でもある。
園芸療法勉強会	学生 12名 教員 8 名 グループ施設 4 施設	園芸療法に関する幅広い情報を集め共有するための場。論文輪読会、園芸療法見学会などを開催している。
海 外 研 修	その都度募集	夏休みを利用して、海外の文化とともに園芸療法実践の場を体験する。2006・2008年は、カナダ西部を訪れた。

4. 園芸療法教育の課題と今後の展望

当大学が行ってきた園芸療法教育の成果を判断するには、2010年3月に卒業する1期生による園芸療法の活用状況を見るまで待つ必要がある。卒業生の活動状況を調査しながら、対象者のニーズに対応するために講義内容を随時見直していく予定であるが、現時点において、いくつかの課題が挙げられているので、今後の展望と共に報告する。

4.1 教育内容の再構築

園芸療法関連授業を通して、ケアの考え方や人間関係について学ぶことができ、さらに水遣りなどの管理作業を通して自らの生活リズムを整えることにも繋がるため、大学に入学したば

かりの1年生が園芸療法関連授業を履修することには大きな意義がある。

一方、1年生はまだ医療・福祉関連の教育を受けていないため、後期に行われるプログラム実習では、対象者が安心して園芸療法の場を過ごすための雰囲気作りなど、セラピストとしてのあり方について学ぶために時間が割かれ、園芸活動の有効性を検討し、園芸活動から得られた効果を評価するといった、プログラム実習本来の目的を達成できていない。

このため、他の科目でリハビリテーションについて学んだ後、応用編として園芸療法を学ぶ時間を設けるなど、複数の学年に授業を分散させる工夫を行うことも必要であろう。

4.2 資格認定制度について

当大学の学生のほとんどは、作業療法士、理学療法士、言語聴覚士として就職することを希望している。一方、少ない人数ではあるが園芸療法士として就職することを希望する学生もいる。園芸療法士として就職し活動するためには、植物や園芸活動に関する高度な知識と技術が不可欠であり、現在の園芸療法の知識だけでは不足であろう。今後は、希望する学生に対して、園芸療法士の臨床実習の機会や、授業以外の取り組みを通して園芸の技術をより深く学ぶ機会を提供する必要がある。

5. まとめ

園芸療法教育には、園芸療法士として直接活用する知識や技術の提供だけではなく、園芸活動を行い自然と関わることによって、生きること、育てること、ケアすることの意味や人間関係について学ぶといった、セラピストに必要な学びの基本的要素を多く含んでいる。改善の余地はあるものの、園芸活動が持つ教育の力を十分に活かすことで、セラピストの教育に貢献できることは多いと実感している。

今後は、卒業生の活動を検討し、授業カリキュラムを整えることに加え、園芸療法研究や園芸療法の情報提供の場としての機能を作り上げ、それぞれを組み合わせることで、園芸療法教育がさらに発展すると考えている。

さらに、園芸療法が持つ効果を積極的に対象者に提供できる園芸療法士を育て、活躍を支えることで、対象者の多様なニーズに沿った園芸療法を届けることに貢献していきたい。

【参考文献】

- 1) 田崎史江 “補完・代替医療 園芸療法” 金芳堂出版、京都、2006、p.94-99.
- 2) 永野明範 介護福祉および幼児教育を専門とする学生への園芸教育について、甲子園短期大学紀要 2004、23：19-28.
- 3) 小浦誠吾、長江嗣郎、原 隆志 園芸実習および園芸療法実習前後の学生の感情変化に関する研究、南九州大学研究報告 2006、21-30.
- 4) 杉原式穂、青山 宏、浅野雅子 園芸療法学の検討ー臨床実習による学生の精神的変化と高齢者イメージ変化ー、専修大学北海道短期大学紀要2006、39：1-15.
- 5) 総務省統計局ホームページ 統計データ “平成18年社会生活基本調査 IV高齢者の生活”
<http://www.stat.go.jp/data/topics/topi244.htm>
- 6) 農林水産省ホームページ 統計資料 “平成14年度食料・農林水産業・農林漁村に関する意向調査 市民農園に関する意向調査結果”、2003
<http://maff.go.jp/toukei/sokuhou/data/shimin-nouen2002/shimin-nouen2002.pdf>
- 7) 文部科学省ホームページ 報告書 “3-2研究の一層の進展が期待される事項”
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/05032201/003/006.htm
- 8) 藤田政良、萩原新 長野県下の福祉施設および医療施設における農・園芸活動の実態と療法的活用に関する調査研究、信州大学農学部AFC報告、2003、1：35-40.
- 9) 社団法人日本作業療法士協会 “作業療法白書 2005” 作業療法 2006
- 10) 堀江昌美、岩満優美、北村径子他 園芸療法が精神疾患患者に与える心理的及び生理的效果の検討、精神科治療学 2004、19：643-649.
- 11) 瀬山和子、大島 峻、葛西ゆかり他 園芸療法によるリラクゼーション効果の一研究 唾液中コルチゾール値の測定と気分調査について、北海道リハビリテーション学会雑誌 2007、34：

- 45-52.
- 12) 杉原式穂、青山宏、杉本光公他 園芸療法が施設高齢者の精神面、認知面および免疫機能に与える効果. 老年精神医学雑誌 2006, 17: 967-975.
- 13) 三浦康平、大竹政充、渡邊恵奈他 フォレストセラピー・成功体験・行動変容デイスサービスパワーリハ利用者の一考察. パワーリハビリテーション 2008, 155-156.
- 14) 館山美奈子、佐藤優実、福士春香 家庭生活への不安を持つ右片麻痺患者への園芸活動効果. 青森県作業療法研究 2002, 11: 37-38.
- 15) 園芸療法研究会西日本“園芸療法 園芸福祉10年のあゆみ” 大阪, 2007.
- 16) 永野明範 園芸療法士養成教育の現状と今後の課題について. 甲子園短期大学紀要 2003, 22: 45-50.